

I ∴ O ∴ S ∴ 魔術トラクト

T M 0 3

封縛のタブレット



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I ∴ O ∴ S ∴

PUBLICATION IN CLASSES C ~ D
IMPRIMATUR: M FRATER I ∴ O ∴ S ∴

First published 2008 by I ∴ O ∴ S ∴

This Edition online ver.1.0, 2008.

All rights reserved. Copyright C 2008 by Tzutom Akibba, I ∴ O ∴ S ∴

1 概 要

本トラクトの趣旨は、魔術の文法を解析し、その知識を背景としてテウルギア全盛時代の代表的な呪法であった封縛のタブレットを、現代の魔術学徒に提示することにある。

2 魔術文法の解析

(1) 魔術呪文の構成

魔術の呪文には、ある特徴がある。

たとえば『グリモワール・ヴェラム』の「剣の招請」(conjunction of sword)を見ると、

「われ汝を招請す。おお、剣のなかの剣よ。

聖なる三つの名前 [NN、NN、NN] により。

あらゆる魔術作業において、わが要塞となり、

見えるもの、見えざるもの、すべての敵からわれを護りたまえ。

大いなる名前シャダイにより、そして三つの名前 [NN、NN、NN] により。

最初にして最後のもの、知恵、径、生命、徳、長、唇、ことば、輝き、光、太陽、泉、栄光、山、門、葡萄酒、石、杖、司祭、不滅のメシアたる剣よ。

わが全ての行いにおいて、われに敵対するものを支配し、明らかにしたまえ。アーメン。」

文中の [NN、NN、NN] には、いわゆる三つの「野蛮な名前」が入る（「エヌエヌ・・」と発音する訳ではない）。

もうひとつ『魔術パピルス文書』から有名な「頭なき者の召喚」を示す。⁽¹⁾

「われ汝を召喚す、頭なき者よ。

地と天を創りし者よ。夜と昼を創りし者よ。

汝は光と闇の創造主なり。

汝は、[Osoronnophris]、未だ人間の見ざりし者。

汝は、[Iabas]、汝は、[Iapos]、

正と不正を見分けたり。女と男を分かちたり、

種と果実を生みたり。人を互いに愛しあい、

憎みあうべく創りたり。

われはモーセ、汝の預言者、汝の密儀、

イスラエルの儀式を司る者なり。

汝は湿と乾をあらわし、あらゆる食物を生みたり。

わが声を聞け。

われは [Paphro Osoronnophris] の天使なり。・・・」(PGM V.99-115)



今度の [] の中にも奇怪な単語が入っている。名前 [Osoronnophris] は、オシリス神の古名「アサール＝ウン＝ネフェル」が転訛したものだが、『魔術パピルス文書』の中には、原型を推測できないほど壊れたものや、ある種の法則性をもつ変形を遂げた単語である [ACHCHO'R ACHCHO'R ACHACHACH PTOUMI CHACHCHO' CHARACHO'CH CHAPTOUME' CHO'RACHARACHO'CH APTOUMI ME'CHO'CHAPTOU CHARACHPTOU CHACHCHO' CHARACHO' PTENACHO'CHEU] のような例もある。

これらの不可思議な単語や名前を「魔術的名前」(voces magicae) と言う。

魔術的名前を含む呪文、または公式 (Formula) には、二種類のセンテンスが混在する。

- ① 意味の取れる文脈を構成する単語の集団
 - ② 意味不明か、文脈を構成しない単語の集団

前者は呪文全体に意味を与える。これは術者の精神に、作業の枠組みとして働く。要するに、今から「愛の魔術」を異性に投げかけようとしているのか、敵対者の攻撃にバリヤーを築こう

(1) Hans Dieter Betz, *The Greek Magical Papyri in Translation, Vol.1*, Chicago : University of Chicago Press, 1986, P.103. 頭なき者とは頭部又は顔を削りとられた神像を意味する。

としているのか、作業の内容について、術者の「目覚めた意識」に呼びかけている。

それによって、魔術的エネルギーを放出する径路が定る。

後者の目的は何か。それ自体では意味を持たない長大な「単語列」は、どのような機能を持つのか？

レベッカ・レセスは、ヘハロート文書を調査して、呪文の二層構造を検証した。⁽²⁾

レセスによるとヘハロート文書の呪文は、次の二種類の構文から構成される。

- | |
|---|
| ① 慣用句 (locutions)
② 非慣用句 (illocutions) |
|---|

「その後、かれは始め命じた。かれ自身に、42文字の名前で封印をするために。

そは [QHT^hY VH HH SNTQQ RVTh^h HVR HIH PPNN
HIH VH VH AG QS IHIH] なり。

すべての文字に君臨し、万物の恐れるもの。すべての天の守護者たちに、喝采を、恐れを、戦慄を与えるものなり。」(ヘハロート文書番号 § 625)⁽³⁾

慣用句で構成された部分は、「42文字の名前」の補足的な意味を付加する。しかし、「42文字の名前」の翻訳ではない。

レセスは非慣用句で構成された「42文字の名前」のみが天使へ直接作用するが、他の慣用句の文章は、力の名前を強調し、明確にする作用があると分析した。

別の呪文では、神名、天使名のほかに意味不明の非慣用句が出てくる。

たとえば文字の組合せからなる次の無意味文字列などである。

[IHVH IV IHVH VV IHVH HV HV IHVH IH HIH
IHVH HI VHII HIV HIH IH IH HHV<IH>IIH
HVH IH IHVH IV HI] (ヘハロート文書番号 § 637)⁽⁴⁾

この文字列は「清浄の言語」と呼ばれる。

従って、レセスはこの論文において呪文の構成要素を最終的に3種類に分類した。

- | |
|--|
| ① 慣用句
② 神聖名(神名及び天使名)である非慣用句
③ ②以外の非慣用句 |
|--|

②と③は、呪文の目的に沿って天使を個々に動かす力を持っている。従って、「力の名前」となる。

しかし、意味の明確な文章を作る①は、②の神聖名同士を結びつけたり、②と③の意味不明な非慣用句を関連づけたりし、呪文全体により一層の強制力を与えると結論した。

レセスの分析した「ヘハロート文書」は、ユダヤ神秘主義独自の文献であるが『魔術パピルス文書』の影響を相互に受けている。⁽⁵⁾ 特に魔術的構文については、ほぼ同一であると考えてもよい。従って、陶片呪文などには無意味文字列の連鎖、神名などに続き意味ある単語列が魔術公式を形成する。⁽⁶⁾

(2) Rebecca Lesses, "The Adjuration of the Prince of the Presence : Performative Utterance in a Jewish Ritual" in *ANCIENT MAGIC AND RITUAL POWER*, Leiden: E.J.Brill, 1995, pp.200-202.

(3) Peter Schafer, *Übersetzung der hekhalot-Literatur IV § 5598-985*, tuingen : J.C.B.Mohr, 1991, p.21.

(4) Schafer, op.sit., p.38.

(5) H.D.Betz, "Jewish Magic in the Greek Magical Papyri(PGM vii.260-71)" in *Envisioning Magic*, Leiden: E.J.Brill, 1997, pp.45-64.

(6) John G. Gager, *Curse Tablets and Binding Spells from the Ancient World*, Oxford : Oxford University Press, 1992, pp.110-112.



さらに、ギリシャ語の魔術的な呪文のなかには、ヘブル語などから転訛し、意味不明のまま②または③となったものも多い。

次の有名なギリシャ語呪文をモデルに、文中の非慣用句を②と③に解析してみよう。⁽⁷⁾

アドナイエ エロアイエ サバオース
 おお、主よ② エロアイオス② 万軍の主よ②

エイエ エサル エイエ
 われは有りて有る者（エヘイエー・アシェル・エヘイエー）②

ソウラ アルバルティアオー オン オン オン ゾン カロス
 ソウラ アルバルティアオ③ は、 は、 は③ 生きて③ 特筆すべき③

エリヨン アノラ アギボール
 至高者② 畏るべき③ 無敵の③

このなかで②に属するものは、「聖なる名前」（sacra nomina）と総称されるが、ほとんどが「神聖名」（シエム・メフォラシュ）である。

上記の③は本来は聖なる名前ではないが、転訛して意味不明となった非慣用句は、ギリシャ語圏の術者にとっては、少なくとも「野蛮なる名前」として機能する。

(7) Gideon Bohak, "Hebrew, Hebrew Everywhere ? : Notes on the Interpretation of VOCES MAGICAE," in *Prayer, Magic, and the Stars in the Ancient and Late Antique World*, Pennsylvania : Pennsylvania State University Press. 2003, p.75.

(2) 名前の力

何故、「聖なる名前」は力をもつのか？

オリゲネス（c185-c254）は、聖なる名前は変更されてはならず、その正しい発音で発声されたときのみ効果を有するとしている。従って、他の言語への翻訳など論外である。⁽⁸⁾

イアンブリコス（c250-c330）も、神聖名と野蛮な名前の特性を説き、外国語へ翻訳された瞬間に効力を失うと解釈した。すなわち、「エジプトに関連する召喚を行うときはエジプト語を用いるべし。」（『エジプトの秘儀』第7節5章）である。⁽⁹⁾

この言語はそれ自体に力があるという信仰は、広く敷衍していた。

古典古代末期の呪文には、ヘブル語やギリシャ語からの音訳がよく用いられた。その主体は神聖名である。一例を示すと、ヘブル語からはアドナイ、インマヌエル、メシアー、ギリシャ語からはヘブル語の口にするのも憚る神の名前テトラグラマトン、ハギオス、オン、ソテル、テオス、ラテン語のデウス、ドミヌスなどである。⁽¹⁰⁾

それら神聖名は固有の神話の枠組みのなかで機能する。

その最たる例としては、『出エジプト記』の燃える柴の逸話のなかにある神の名前のくだりである。

「民が『その名は何といわれるか』と問うたとき、いかに答えるべきや。

神はモーシェに言われた『われは有りてある者』。

イスラエルの子らにこう答えよ。『「われは有る」という方がわたしを使わされた。』」

（『出エジプト記』3章13-14）

しかし、タルグム（旧約聖書のアラム語訳）の一節はこのように補足されている。

「民が『その名は何といわれるか』と問うたとき、いかに答えるべきや。

神はモーシェに言われた『われは有りてある者』。

イスラエルの子らにこう答えよ。『初めにありし世界に、存在せよと命じ、それ故に世界が存在しうる声を発せし方がわたしを使わされた。』」

（『タルグム・ノエフティ』における『出エジプト記』3章13-14 関連部分）⁽¹¹⁾

ヘブル語の神の名前と対応する創世神話の物語とを不可分に溶融させるつながりが存在する。この神聖名は、土器の内側に書かれようと、人の声で唱えられようと、それと認知した瞬間に創世神話の力を発揮するのである。⁽¹²⁾ もちろん、『旧約聖書』に慣れ親しんだ文化環境に育った者なら、その効果は戦慄すべきものがあるろう。

ユダヤ教神秘主義においては、神聖名は「外在する名前」（Explicit Name）と呼ばれる。ヘブル語では、語幹「フォラシュ פִּלְשׁ」（説明する／明白にする／外在する）から派生した「シエム・ハ・メフォラシュ שֵׁם הַמְּפֹרָשׁ」となる。ヘブル語のメフォラシュという受動態の分詞には、「発音された」、「周知の」、「明瞭に表現された」という意味があるが、同時に文脈上は「切り離された」または「隠された」という意味になる場合がある。従って、シエム・ハ・メフォラシュは「（発音され）外在化した名前」であると同時に「（隠され）内在化した名前」という二義性が存在する。⁽¹³⁾

これらの「外在する名前」には、固有のアイコン的な力がある。⁽¹⁴⁾

ユダヤの神秘家たちは、その力を創造の源泉と結びつけた。

(8) Richard Kieckhefer, *Magic in the Middle Ages*, Cambridge : Cambridge University Press, 1989, pp.39f.

(9) Iamblichus, *On the Mysteries*, Tr.by T.Taylor, San Diego : Wizard Bookshelf, 1997, p.295.

(10) Don C. Skemer, *Binding Words : Textual Amulets in the Middle Ages*, Pennsylvania : Pennsylvania University Press, 2006, p.112.

(11) Naomi Janowitz, *Icons of Power : Ritual Practices in late Antiquity*, Pennsylvania : Pennsylvania University Press, 2002, p.21f.

(12) Janowitz, op.sit., p.26.

(13) ゲルショム・ショーレム 「神の名とカバラーの言語理論」 『エラノス叢書 9 言葉と創造』 平凡社、1995年、92-93頁。

(14) Janowitz, op.sit., pp.28-31.

「深淵を閉じ、力強く誉れある御名により封印せし者よ」（『マナセーの祈り』3節）⁽¹⁵⁾

ユダヤ教カバリストたちはテトラグラマトンを神の本名、つまり、シェム・ハ・エツェムとし、アイン・ソフによる爆発的な世界の流出のなかで、他のすべてのシェム・ハ・メフォラシユが生まれ、言葉はアイン・ソフの流出のエネルギーを凝縮して内包し、言葉が発せられる都度、そのエネルギーを自己展開すると解釈した。⁽¹⁶⁾

シェム・ハ・メフォラシユ以外の神聖名／外在する名前についても、言葉の本来の意味が不明であってさえ、人の心を激しく揺さぶる力を持っている。

「KOMPHTHO KOMASITH KOMNOUN（コムフソー コマシース コムヌーン）
世界を叩き揺さぶる者よ。」（PGM IV.1323）⁽¹⁷⁾

『ライデン・パピルス』の研究で知られるフランシス・L・グリフィスは、この『魔術パピルス文書』の神聖名を、コプト語の「大地を揺さぶる者、地表を揺さぶる者、深淵を揺さぶる者」だと解釈した。しかし、その名前をもつ神が、実際に信仰されていた訳ではない。

しかし、神聖名として術者たちに広く認知され、流布した名前は力をもつ。それは前出のユダヤ教の「外在する名前」と同様に、アンリ・コルバンの言う「第2の神顕現」つまり、「神聖名」と「属性」の顕現が行われた際に、特別な力が神聖名に封印されるからである。⁽¹⁸⁾

神聖名、とりわけ国際的に認知された神聖名は、明確な意味をもたなくとも、その代表する神聖力を儀式のなかで発動するのである。⁽¹⁹⁾

一方、レセスの言う「神聖名以外の非慣用句」についてはどうか？

他の言語からの音訳で意味不明になったものは、オリゲネスの言うように不十分な力しか有していないだろうが、実は言葉になる前のゴエティアーについては、原初の力を有している。

プロティノスは、当時の墮落した魔術を非難しているが、そのおりに魔術師が使った技法について「声とともに節回し、叫び声、息使い、歯擦音を使う。」⁽²⁰⁾と述べている。

しかし、これらは通常の発声だけでは発音できない「野蛮な名前」を用いるときの補助手段であった。実のところ、神聖名でさえ、上記の補助手段を用いて使われることがある。

しかし、ゴエティアーは辻占師の発音のテクニックではない。その力は、儀式的哀悼、治療、神占術などとゴエースの恍惚の精神状態を組み合わせたものである。⁽²¹⁾ シェファアーは、メルカバ神秘主義においてもトランス及びエクスタシーの重要性を指摘している。⁽²²⁾ エリアーデがシャーマンとエクスタシーの不可分としているが、ゴエースなどの技法はシャーマン的なものであるとも言える。

(15) The Prayer of Manasseh, in *The Old Testament Pseudepigrapha*, Vol.2, New York : Doubleday, 1985, p.634.

(16) ショーレム、前掲書、124頁。

(17) Betz, 1986, op. cit., p.63.

(18) コルバンはイブン・アルアラビー学派の見解として、第一の神顕現を本質の顕現、第二を神名と属性の顕現、第三を存在の光／神名としての顕現にまとめている（アンリ・コルバン 「一神教のパラドクス」『エラノス叢書 6 一なるものと多なるもの I』平凡社、1991年、136-137頁。）。

(19) Naomi Janowitz, *Magic in the Roman World*, London : Routledge, 2001, p.52.

(20) 『プロティノス全集』第2巻（『エネアデス』II 9-14）、中央公論社、1987年、136頁

(21) Fritz Graf, *Magic in the Ancient World*, Cambridge : Harvard University Press, 1997, p.24.

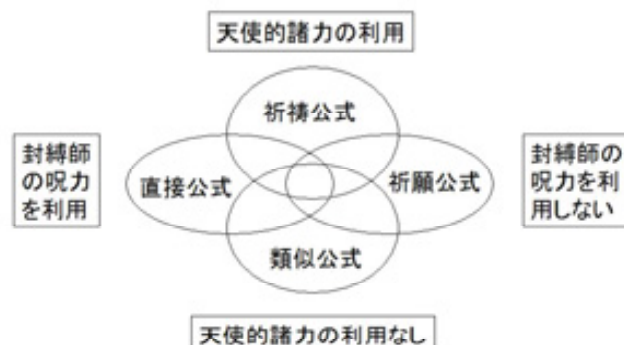
(22) Peter Schafer, *The Hidden and Manifest God*, New York : State University of New York Press, 1992, p.155.

(3) 有意味文の構造

古代ギリシャの封縛呪文 (binding spell、ギリシャ語では κατάδεσμος (カタデスモス) と、ラテン語では defixio (デフィキシオ) という。) を研究したクリストファー・ファラオネは、封縛呪法 (defixiones) の文法には4種類の形態があることに着目した。⁽²³⁾

- ① 直接公式 (direct binding formula)
封縛師 (defigens) は目標となる人 (神) 格、或いはその身体器官の一部に
「われNNを封縛せん。(καταδῶ τον δειῖνα) 」と直接的に働きかける。
- ② 祈祷公式 (prayer formula)
封縛師は、神やダイモーンを召喚し、封縛と同様な他者への命令を繰り返し
懇願する。「NNを拘束せよ。(κατέχετε τον δειῖνα) 」と命令する。
- ③ 祈願公式 (wish formula)
封縛師は、祈願法の文法を用いて祈願する。
「NNに成功がもたらされるように。(ὁκό δειῖνα ἀτελή) 」
- ④ 類似公式 (similia similibus formula)
封縛師は、類比的文法を用いて説得する。
「この屍が冷たく生命に欠けるように、NNも冷たく生命に欠けるように。」

それぞれの公式の関係を封縛という作用果をもたらす最大の作用因を表示し、図式化すると下図のようになる。



中央の楕円がそれぞれの公式 (formula) を示す。

直接公式は封縛師のもつ呪力または魔術的確信から流出するマナを原動力としている。従って、この公式を多用すると封縛師は消耗する。

祈祷公式は天使的諸力を召喚し、その力で封縛を成功させる。そのため適当な諸力をあらかじめ選考する必要がある。

祈願公式は封縛師の呪力ではなく宇宙の法則に訴えかける。

類似公式は、「似たものが似たもの (similia similibus) に作用する」法則を利用した一種の類感魔術である。

しかし、すべての公式が単一の作用因により動いている訳ではない。

しばしば、直接公式には神の名前が付される。

「ヘルメス・クトニオスとヘルメス・カトコスの御前において、

われオフエリオンとカセリスを封縛せん。」

従って、さまざまな組み合わせが成立する。

この汎用の公式は『魔術パピルス文書』とその影響を受けた古典古代の魔術公式に敷衍した。

一方、同時代のヘハロート神秘主義のコンテキストには、別の文法が成立する。

ペーター・シェファーの分類によれば、次の八つの公式が存在する。

(23) Christopher A. Faraone, "The Agonistic Context of Early Greek Binding Spell" in *Magika Hiera*, Oxford: Oxford University Press, 1991, pp.4-6. なお、「封縛」という訳語は著者の造語である。

- ① 起誓する (to adjure להשביע)
- ② 招請する (to call לקרוא)
- ③ 探索する (to seek לבקש על)
- ④ 自らを封縛する、封縛される、他者を封縛する (to bind oneself, to be bound, to bind others להזקי, להיזקק, לזקק)
- ⑤ 名付ける、言及する、発音する
(to name or mention or pronounce להזכיר)
- ⑥ 天使を使役する
(to make use of the angel בו להשתמש)
- ⑦ 天使を使役する
(to bring down the angel להוריד)
- ⑧ 布告、叙階する
(to decree, ordain לקיים, לגזור)

一方、レベッカ・レセスは、起誓言 (adjuration) の公式を次のように分類した。⁽²⁴⁾
 なお、起誓言 (adjuration) とは天使的存在に強制力のある命令を発する特殊な公式による構文を意味する。

- ① 直接起誓言 (direct adjuration)
- ② 祈 禱 (prayers)
- ③ 名前の朗唱 (recitation of the name)
- ④ 名前の計数 (counting the name)
- ⑤ 説明文のなかの起誓公式 (adjurational formulas in a narrative framework)
- ⑥ 力の名前の使用 (use of powerful names)

ヘハポート文学において起誓の公式は多用されているが、そこで表現されるのは天使を使役する起誓言だけではない。

ヤーノビッツは、『秘密の書 (セフェル・ハ・ラツィム) 』を例にとり、公式を解析した。起誓言に該当する部分の代表的な構成は次のとおりである。

「聖なるかな、玉座にひとりあるかの名前
 聖なるかな、陛下の坐す場 (にあるかの名前) よ
 聖なるかな、生きとし生ける者の口に登るかの名前よ
 聖なるかな、あまたの被造物の歌 (にあるかの名前) よ
 聖なるかな、主よ、常永久に」

7 階層の詠唱のなかで、第 6 階層までは起誓言の形式が用いられるが、最高の階層においては起誓言はなく、賛美歌のみが詠唱される。当然ながら天使的存在への要求はない。⁽²⁵⁾

(24) Rebecca Macy Lesses, *Ritual Practices to gain power*, Harrisburg : Trinity Press International, 1998, p.75.

(25) Janowitz, *Icons of Power*, pp.95f.

3 封縛のタブレット

(1) 封縛呪文の変遷

ギリシャ語の「封縛（カタデスモス）」という単語は、「縛める」「縛りつける」などの意味をもつカタデインを語源としている。一方、ラテン語の同義語である「封縛（デフィキシオ）」は「縛る」「釘づける」などの意味をもつデフィゲーレを語源としている。⁽²⁶⁾

封縛という概念は、古典古代の魔術公式を探る鍵である。多くの場合、封縛の呪文は鉛の薄片、陶器の欠片、石灰石、半貴石、パピルス、蠟板、陶器の鉢などに描かれた呪符として発見された。描かれた文字は、発音された言葉と表裏一体で、しかも等価であり、術者が魔術公式を発動するときは、封縛の呪文も声高らかに鳴り響くのである。

最も初期の封縛の記録は、紀元前5～4世紀のシシリア島産やアッティカ地方産の呪符として発掘されている。それらの呪符には、多くの場合、目標となる相手の名前のみが描かれており、呪文や、神霊の名前は付記されていない。

{左写真}



1～3世紀頃作成された鉛製の呪符
青銅のペンで呪文が書き込まれ、
折りたたまれ、誰にも読めないよう
な状態で保管されていたもの。
内部は腐食して判読できない。
鉛は呪文を刻み易く、入手も容易な
ため古典古代の魔術において、良く
使用された。

封縛の呪符は時代が下るとともに精緻となり、ギリシャ語で描かれた時代には、神霊の名前は頻出しないが、紀元1世紀のローマ時代においては豊富な内容を誇るようになる。ギリシャ語時代に顕著な特徴は「エフェソス文字（Ephesia Grammata）」と呼ばれる六単語である。エフェソスは小アジアの主都として、現在のトルコ西部イズミール州南部に栄えた古代都市であり、ヘレニズム世界の魔術の中心地でもあった。

紀元前4世紀のクレタ島の陶器片などには、このエフェソス語による六単語が散りばめられていた。その単語とは「アスキオン、カタスキオン、リックス、テトラックス、ダムナメネウス、アイシア」である。この6単語は文字として書かれても発音されても効力を発揮する。『スーダ』等の同時代資料は、エフェソス文字を踵に書き込んだエフェソスの拳闘士がオリンピックで勝利を重ねた逸話や、リディヤ王クロエソスがエフェソス文字を使用して危うく火葬の薪から逃れた事例を紹介している。邪悪を退けるエフェソスの六単語は、守護神アルテミスに結びつけられ長く信仰された。⁽²⁷⁾

紀元四世紀頃のローマ風の封縛呪符の特徴は、次のとおりである。⁽²⁸⁾

- ① 神秘言語（Voces Mysticae）又はその他の反知性的（unintelligible）言語が全体の8割から9割を占め、エフェソス文字は一、二行を占めるだけである。
- ② 神霊の名前又は召喚文が顕著に長く、より精緻になり、後代になるほど積極的な国際性を備えるようになる。
- ③ 人間及び動物の図像が入り、占星学的記号（キャラクテレス）が偏在する。
- ④ エジプト的要素の混在、エジプトに起源をもつ呪符がギリシャ語と融溶して普遍化した経緯から、主として神々の敵役としてのエジプト起源の神格の使用が認められる。

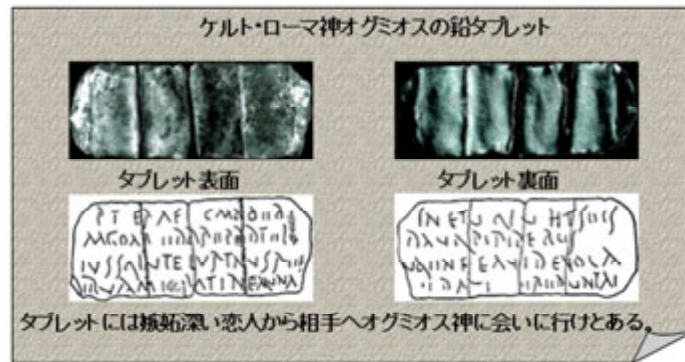
ローマ帝国におけるシンクレティズムの勃興により、古代エジプト、ギリシャの魔術様式は

(26) John G. Gager, *Curse Tablets and Binding Spells from the Ancient World*, New York : Oxford University Press, 1992, p.30, n.1.

(27) Clinton E. Arnold, *Power and Magic: The Concept of Power in Ephesians*, Eugene : Wipf and Stock Publishers, 2001, pp.15-17.

(28) Gager, op. cit., pp.6f.

新たな綜合の流れに同化されていく。初期のエフェソス文字は消え去らずに、新たに活躍の機会を増やしてきた神秘言語のなかに埋もれて、封縛呪文の一隅を照らすこととなった。

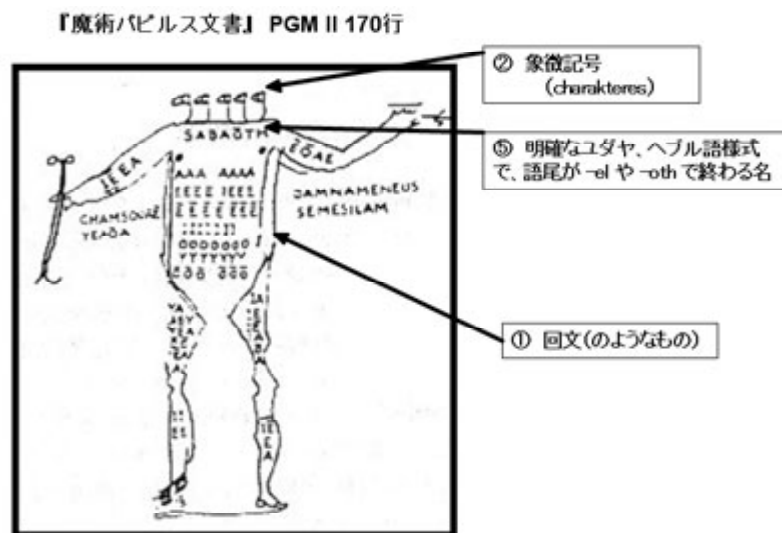


ローマ時代に進行した封縛呪文の一般的傾向は、次のとおりである。⁽²⁹⁾

- ① 回文
- ② 象徴記号 (charakteres)
- ③ 母音の連続
- ④ 三角形、四角形、「翼」、その他幾何学図形を文字で形作ること
- ⑤ 明確なユダヤ、ヘブル語様式で、語尾が -el や -oth で終わる名前
- ⑥ 神秘言語、その時代の一般的用法ではなく、ギリシャ語か、ヘブル語か、その他の言語なのか判別のつき難いもの
- ⑦ 再現性のある公式 (PGMではロゴイと呼ばれる。)、幾つかの神秘言語で構成され本文では「ABC公式」のように略語で呼ばれるもの

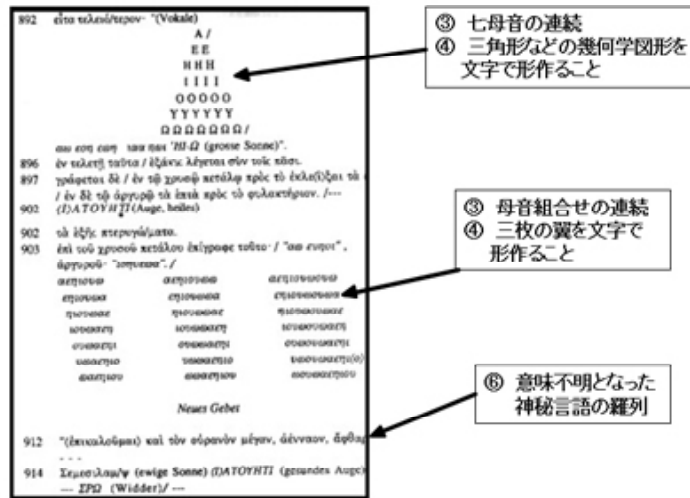
お馴染みの『魔術パピルス文書』から例を探すと次のようなものがある。

PGMは Papyri Graecae Magicae の略、ローマ数字は巻数、アラビア数字は該当行を示す。



(29) Gager, op. cit., pp.7f.

『魔術パピルス文書』 PGM XIII 892~914行



『魔術パピルス文書』はその名の通り、呪文の公文等をパピルス紙に書き残したものであり、広く魔術師たちの高覧に付されたものが多い。一方、発掘された単品生産の呪符は、その特定の目的だけのために作成されたものであり、個性的なデザインがある。

それらの宝石の護符、鉛の呪符、羊皮紙やパピルス断片に記され、埋め込まれた呪符の書き付けにおいても人間や動物の絵が頻出するようになった。

シリアのバイルートで発見された典型的な鉛の呪符を筆写した右図においても、ダイヤモンドとも人間ともつかぬ稚拙な人型の図像が描かれている。

青党派への呪詛として作られており、最上部に彫られた「馬と戦車への制御」は呪文ではなく、題名である。⁽³⁰⁾

母音を強調した反復する野蛮な名前を三角形に配列する文体、AKRAMMACHAMAREIの公式（前ページの分類では⑦の例）などが容易に判別できる。

頭部と胴体と脚のみが描かれた人型の図像は、封縛のプロセスを示しており、腕は胴体を取り巻く皮で巻き込まれ、その上に丸で示されたのは釘付けにした釘の頭である。

なお、組成の良くない鉛板に絵心のない術者が青銅のペンで苦労しながら刻み込むことを考慮すると文字の筆致や、絵のバランスが悪くなるのは必然である。



馬と戦車への制御

PHRIX PHOX BELABOU
STOKTA NEOTER いずかた
大地の上なるも下なる DAMENO
DAMENA LUKODAMENA
MENIPPA FURIPGANUX
EULAMIO
EULAM
EULA
[EUL]
[EUL]
[E]

OREOBARZAGRA
AKRAMMACHAMAREI
PHNOUKENTABAOTH
OBARABAU, 汝、聖なる天使
待伏せ、制御する LULATAU
AUDONISTA されば、呪符
OLATTINOUNAMINTOU
MASKELLI MASKELLO
PHNOUKENTABAOTH
OREOBARZA, 今汝等、封縛
倒せ、新りつけよ、縋々にせよ
馬と戦車の乗手を見分けるのは
青き色をせり - Nomphalos,
Thalophoros, Aitotos,
Mousotrophos, Kalomorphos,
Philopartenos, Pantomados,
Mopetos, Philamatos, Makas,
Omphalos, Hagemos, Okeanos,
Tuxanos, Chelios, Kalamorphos,
Axeos, Aitotobolos, Egdalos,
Zabados, Chelios, Nomothetis,
Barbaros, Eiseronkis Xasi, Makas,
Dinatos, Antharatos, Philophoros,
Lukotamos, Gemanos,
Obelikos, Asotophos,
Anatolikos, Antiochos - CHORAE,
封縛せよ CHORAE, 縋のつけよ
両手を、両足を、縋を
馬と青色の戦車の乗手

(30) Gager, op. cit., pp.53-55.

(2) 封縛呪文の用途

ジョン・ゲイガーによると封縛呪文の用途別分類は、次の5種類になる。⁽³¹⁾

- ① 司法の封縛 (defixiones iudicariae)
裁判で敵手を傷つけようとする試み。この呪法は紀元前5～4世紀にかけて主にアテネで用いられ、その後、あらゆる時代と場所で用いられた。
- ② 愛恋の封縛 (defixiones amatoriae)
思いを寄せた相手と相愛になり、放埒な愛交を試みる目的の封縛であり、文学的主題としてはソポクレスの『トラキスの女たち』の頃から用いられ、このエロティックな呪文は当然ながら広範に流布した。
- ③ 闘技の封縛 (defixiones agonisticae)
闘技場やその他の祭典の文脈上で用いられ、帝政期に特に例証された。
- ④ 中傷者や盗人に対抗する封縛
デメテルやクニドスの聖域から印象的な多数の呪文が発見されている。むろん、他の地方においても多数の事例がある。
- ⑤ 経済的競争に関わる封縛
紀元前4世紀頃から帝政期にかけて魔術パピルス文書などに散見される。

鉛板やパピルス紙の平面上に描かれる図像のほかに、立体の人形を用いて封縛をかける場合もあった。エジプトでは中王国時代(紀元前2133年～1786年)に個人的な敵の姿を蠟にうつして墓に埋めオシリスに厳しく扱うよう願うものがあった。同様の呪術はギリシャ世界においても、鉛、泥、蠟の人形を用いて紀元前4世紀頃から散見される。⁽³²⁾ それらには三つのパターンがあった。

- ① 愛交の呪文
術者の愛情、浴情の対象を真似るもの。
かなり生々しい事例としては『魔術パピルス文書』に処方箋の載っている右図のような例がある。

「PGM IV 296-334 恋人を封縛する驚異的呪文。
蠟(土)を取り、男と女の人形を作る。・・・
彼女を作るとき、両手を後ろに回し、跪かせよ。
彼女の頭部か首に魔術物を縛りつける。人形には、
次の呪文を描く。頭部には、ISEE IAO ITHI OUNE
BRIDO LOTHION NEBOUTOSQUALETH 右耳には・・・
そして十三本の青銅の針を用意し、一本を胸に、
[われ汝の胸を貫く、NNよ]と言いながら刺す、
二本を両耳に、二本を両目に、一本を唇に、二本
を胴体の中央に、一本を手、二本を外陰部に、
二本を靴底に打ち込む。それぞれ、次のように言
いながら[われは○○を汝の○○として貫く、NN
よ。それ故に、彼女はわれのほか思い返すことなし
NNよ、われひとり。]そののち、鉛のタブレット
に同じ呪文を刻み、詠唱せよ。そして、鉛板を人形
に巻きつけ365の結び目をもつ糸で縛り、かく言
うべし。[アブラクサス、彼女を疾く縛めよ。]
この呪符は日が沈む瞬間に、暴力により予期せぬ死
を遂げた死者の墓の傍らに埋めよ。」



エジプトのアンチオノポリス
付近の墓所から出土した十三
本の釘で封じられた人形
(ルーブル美術館所蔵)

(31) Fritz Graf, *Magic in the Ancient World*, London : Harvard University Press, 1997, pp.120f.
(32) Gager, op. cit., pp.15-22.

② 個人的な敵への攻撃呪文

アテネで発見された紀元前4世紀頃の鉛の人形は、小型の棺に納められ敵の名前が書かれてあった。

③ 公敵への攻撃呪文

アンティオケから出土した九体の馬の人形には、乗手と馬の名前が散見された。他の地方においても、競馬（戦車競技）の対戦者の人間と馬のペアを呪う呪符が多々発見されている。

愛の魔術も望まぬ相手にかければ一種の攻撃であるが、他の攻撃呪文は相手に経済的、肉体的、精神的打撃を与えることを目的としている。そのため、強力な神を招請した。

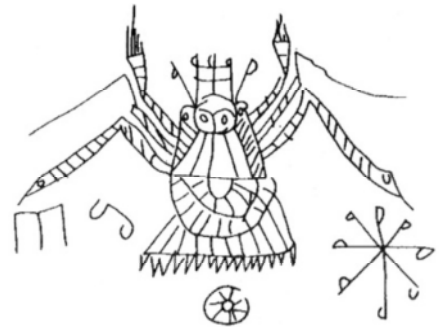
ギリシャ神話世界における魔術の神は、ヘカテである。

女神ヘカテの語源はインド＝ヨーロッパ語族には存在せず、直接、魔術の源流であったエジプト神話から輸入されたようだ。エジプトの古い豊穡の女神ヘクトと同じく、魔力を意味するヘカという単語の変形したものである。⁽³³⁾

右図の呪符に描かれた鳥のような怪物は、三枚の翼をもつヘカテと呼ばれている（六つの腕をもつヘカテと呼ばれる場合もある）。

これは1世紀頃のアテネで作成された鉛板のタブレットに刻まれた稚拙な線刻である。

この封縛のタブレットを作成した者は、盗賊の被害にあい、憎むべき相手を特定できなかったようだ。地下世界の諸神に呼びかけたあと、問題の盗賊の始末をヘカテに委ねる旨が書かれている。⁽³⁴⁾



「われは記名されし執行者に意義を申し立てる。われの意志に反して盗人により被害を受けた者なり。われは正式に登録し、委ねる。ブルートゥヘ、フェイトヘ、ペルセポネーヘ、フューリーヘ、そしてすべての危害を加える者へ。われはヘカテに委ねる。神々に委託されし者を食らう神よ。われは地下世界の神と女神に委ねる。・・・天国の女主人ヘカテよ、地下世界のヘカテよ、十字路のヘカテよ、三つ顔のヘカテよ、ひとつ顔のヘカテよ、この地より盗みを働かし、盗人の盗人どもの心臓を切り取れ。大地は歩むこと能わず、海は走ること能わず、生命のすべての喜びを奪い、子をなすことなく、ただ、破滅のみが、かれ、または、かれらの上に訪れよ。断罪者として、かれらの上に青銅の半月鎌を振り下ろし、切り払え。われここに記名されし執行者に申し立てる」

(33) マーティン・パナール 『黒いアテナ II 考古学と文書にみる証拠』 藤原書店、2005年、872頁。

(34) Gager, op. cit., pp.180-183.

(3) テウルギア的背景

a テウルギアの思想

歴史的見地から封縛の呪文を解説してきたが、その大多数は『魔術パピルス文書』にあるように現世利益追求型の呪術である。しかしながら、1世紀以降に急速に普及してきたより純化された思想もあった。それがテウルギアである。

テウルギアは、末期新プラトン主義者たちの精神的支柱であった。その契機となったのは紀元2世紀後半にカルデア人ユリアノスとその息子テウルゴイ、ユリアノスが著述した『カルデア神託』である。新プラトン主義者はあたかも『カルデア神託』以前と以後に分けられるようだ。プロティノス、ポルピュリオスらの思想と、『カルデア神託』を参照したイアンブリコス、プロクロスらの思想では性格が異なる。⁽³⁵⁾

テウルギアは蔓延する実利主義の魔術に対するアンチ・テーゼとして誕生した。その目指すところは、テウルギアの儀式を通じて靈魂を浄化し、靈魂の救済へと至ることである。

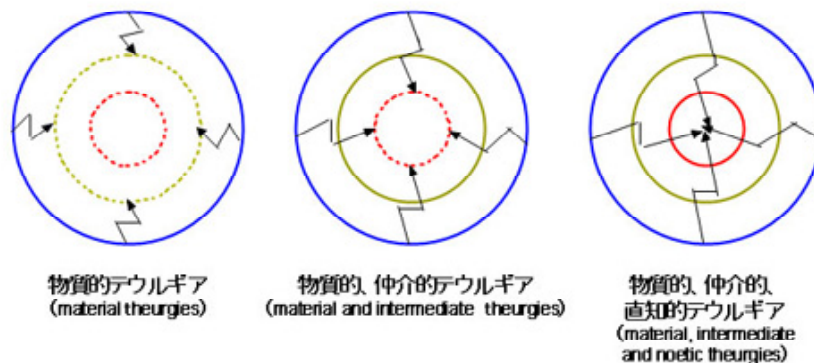
しかし、前章までに紹介してきた封縛呪文とテウルギアの靈術に、技術的な差違は殆どない。テウルゴイが強調したのは、精神面と神の召喚に関する態度であった。

イアンブリコスは、ゴエティアが神に命令し、その意志に反した強制的召喚を行うのに対して、テウルギアは神に招請され、肉体を有しながら靈魂を上昇させ、神聖な諸力と共和し、神々に賦活され人間以上の力をもつ術者の靈魂が効力を発するのだと言う。⁽³⁶⁾

ローレンス・ロザンは、高次の、垂直的テウルギアと、低次の、水平的テウルギアとを区別しようとした。高次テウルギアは思惟（フィリア）の作用により、人間と神との垂直的な結びつきを作ることを目的とし、低次テウルギアは共感（シンパセア）の作用により、人間とダイモンとの間に水平的な関係を作り出す。しかしながら、テウルギアの実践者を高低の2種類に分けるという試みは破綻した。

靈的清浄さでは定評のあったイアンブリコスさえ、テウルゴイとしては物質的な儀礼を厭わなかったからだ。従って、高低というカテゴリーでテウルギアを整理することは難しく、個々の作業に、垂直的要素と水平的要素が存在すると認識すればよい。⁽³⁷⁾

テウルゴイは世界を三つの同心円で表現した。その中心円は直知的なもので構成される「浄火界」であり、その周囲を天球、すなわち星々のアストラル・ライトが満たす「アィテール界」又は「星辰界」、そして外周にわれわれの住む「物質界」又は「月下界」がある。



イアンブリコスは、各世界において物質的な操作、仲介的操作、そして直知的操作があり得ると考えていたようだ。しかも、術者の内的成長に伴い、物質界におけるテウルギアが、徐々にアィテール界、浄火界のテウルギアが付け加わっていくことを考えた。つまり、最も高次の成長を遂げたテウルゴイはその三者すべてを扱えるようになっている。⁽³⁸⁾

(35) 堀江聡 「『カルデア神託』と神働術」 『ネオプラトニカル新プラトン主義の影響史』、昭和堂、1998年、101頁。

(36) Iamblichus, *On the Mysteries*, I – XIII, op. cit., pp.55-57.

(37) Sarah Iles Johnston, *Hekate Soteira, : A Study of Hekate's Role in the Chaldean Oracles and Related Literature*, Atlanta : Scholars Press, 1990, pp.77f.

(38) Gregory Shaw, *Theurgy and the Soul : The Neoplatonism of Iamblichus*, University Park : The Pennsylvania University Press, 1995, pp.155-161.

b 合

テウルギアにおける「合」(Conjunction, σύσταις)とは、(神霊との)「通信」もしくは「接触」を意味する言葉である。この場合、天体の合(天体同士が最も近接する瞬間)と同じく影響力が最大となるが、決して軌道が交わったりしない。つまり、神霊との完全な合一ではない。

この単語は元来、『魔術パピルス文書』においては、魔術師と召喚された神霊との特殊な交流を意味した。例えば、「神的憑依を達成するソロモンの呪法」などである。⁽³⁹⁾

「FOURIOR AMEN IM TAR CHOB KLAMPFOB PHRE PHROR PTAR OUSIRI SAIBO TELO KABE・・・
わが声を聞け、すなわち、わが聖なる声を。されば汝の神聖名を呼び、わが願いを
伝えんとすなり。・・・かれのなかに入り、われに顕現せよ。」

召喚／招請により、神霊との「合」が発生している間に魔術師／テウルゴイは、神霊と契約し、上昇した靈魂は神霊の援助を受ける。『カルデア神託』には次のように語られる。

「<合>を行い、祈祷し、言い表し得ないカルデアの魔術環を用いた。」
(神託断片 M-208／典拠：マリヌス『プロクロス伝』)⁽⁴⁰⁾

c 招 請

魔術の世界では、一般的に行われた儀礼ではあるが、テウルギアにおいては、「招請」(Conjunction, δεσμοί, αναγγελία, βία)とは、神像を固縛、解放することにより活性化するという意味を有する。

(a) テレスタイ

招請の具体的な技法としてテレスタイがある。翻訳し辛い単語だが、ハンス・ルウィはテレスタイ(Telestic Art, τελεσται)を次の3種類に分類した。⁽⁴¹⁾

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 地上生活を送る人間の肉体と靈魂を秘儀を通じて浄化すること。② 神像を設置し、聖別すること③ 神像に神のイメージを入れ、活性化すること |
|--|

重要なのは3番目の「神像活性化」(Telesticon, τελεστιχή)である。

高名な『ヘルメス文書』は、神像等が生命を帯び意識をもつことを言及した。⁽⁴²⁾

イアンブリコス神像は神霊の受容体として、石材、香草、動物、香料をはじめ神のかたちを模するあらゆる素材が用いられることを言及した。⁽⁴³⁾ また、プロクロスは、テウルギアの魔術的操作で神像に神が宿るとき、神像がテレスタイにより輝き、生命を得て動き出すと言及した。⁽⁴⁴⁾ ローマにおいて、家庭の儀式には小さな像が、公的宗教の儀式には大きな像が用いられた。香草や小石が像の中に置かれ、神聖な顕現を招く媒体とされた。⁽⁴⁵⁾

神託自体がこの魔術的操作の生々しい部分に言及している。

「(神御自身が)神像がいかにあるべきかを助言する。ヘカテの下せし託宣により明らかにすべし。

されば、わが神像を教授せる方法により清めるべし。野生のヘンルーダで形を作

(39) Betz, PGM IV 850-929, op. cit., pp.55f.

ただし、当該呪法は、少年又は青年を依代として神霊を降ろし、3日間の同性愛行為により、その神霊を術者に移し変えるという特殊な作業を含んでいる。

(40) Ruth Majercik, *The Chaldean Oracles*, Leiden : E.J.Brill, 1989, pp.127, 215.

(41) Hans Lewy, *Chaldean Oracles and Theurgy*, Paris : Etudes Augustiniennes, 1978, pp.495f.

(42) Walter Scott, *HERMETICA, Vol.1, ASCLEPIUS III 24ab*, Oxford : Oxford University Press, 1924, pp.349-341.

(43) Iamblichus, *On the Mysteries*, V-X XIII, op. cit., pp.266f.

(44) プロクロス 『プラトン神学』 第70巻9章。Hans Lewy, op. cit.

(45) Janowitz, *Magic in the Roman World*, op. cit., p.54.

り、小動物で飾るべし。家の周りに住む蜥蜴などがよい。没薬、ゴム、フランキンセンスをこれら小動物に練り込み、月の満ちる時期に外気に晒せ、これを汝自ら行い次の呪文を唱えよ。」（神託断片 M-224）⁽⁴⁶⁾

準備作業はいささかグロテスクだが、準備作業は共感（シンパセチア）を生み出すためにある。それ自体は無機物である神像に神々やダイモンを招請し、それにより、神像があたかも生きてるように働きかけ、結果を得るためには、それなりの準備と覚悟が必要なのである。⁽⁴⁷⁾

（b）束縛と解放

招請の第2の呪法については、テウルギアを行う術者が光体で身を鎧い、「神秘なる言葉」（voces mysticae）を武器として、神霊を「束縛」（Epethisaz, επεδησαζ）し、「解放」（Exlisiz, εχλυσιζ）するものだ。⁽⁴⁸⁾

封縛の最重要のプロセスである神霊の「束縛」と「解放」をシステム化したものであり、当時の魔術的技法の延長であるが、より洗練されている。この技法はヘルメス学の召喚／喚起の儀式において、神霊の束縛と解放として継承されていく。

「わが声を聞け、わが意に染まぬとしても、汝が必要に迫られ、われを束縛（επεδησαζ）したからには。」（神託断片 M-220）⁽⁴⁹⁾

「卑賤なる可死者が地上の物事に心を奪われしとき、神は解放（εχλυσιζ）される。」（神託断片 M-141）⁽⁵⁰⁾

儀式に先立ち、招請者（χλητωρ）または、受容者（δοχευς）は、儀式場の浄化及び聖別を行う。海水を用いた浄化儀礼は、当時、広く流布しており、プロクロスも一月の間海水に浸って清めた経験がある。

その手法は一部、水の浄化、火の聖別として、黄金の夜明け団にも継承された。

「さすれば、参入式に臨むテウルゴイは、浄化し、散水せねばならぬ。かく語りしごとく、まず火の業を治めし司祭は、荒れ狂う海の清めの水を撒かねばならず。」（神託断片 M-133/W-193）⁽⁵¹⁾

招請者は、光の衣を纏い、神秘なる言葉を用いて、神を固縛する。その結果は、招請者、または、受容者の靈魂を神が引き上げ、神的憑依の状態になることだ。この過程は、神の聖なる名前を発音することで、神霊の世界に回路が開け、神が霊的光線を招請者の心臓に照射し、その靈魂を引き上げる様子で描写されている。

この過程を「上昇」（αναγωγή）という。

そして、この状態にある術者は、さまざまな奇瑞を発する。イアンブリコス、その徴候を次のように列挙した。

「・・・靈感の訪れは、全身の痙攣、部分的な震え、完璧な弛緩、美しい調和、踊り出すこと、優雅なる音響、或いはこれらの対比により示される。・・・」⁽⁵²⁾

さらには、術者の空中浮遊、声、光が発すること、光線が術者の身体を出入することで確認される場合もある。そして、次の段階で招請者の前に神が出現する。最初は、形なき存在として、次に様々な目に見える形態として、顕現する。

(46) Majercik, op. sit., pp.137.

(47) Majercik, op. sit., pp.26f.

(48) Lewy, op. sit., pp.41f, 57f.

(49) Majercik, op. sit., pp.135, 219.

(50) Majercik, op. sit., pp.103, 194.

(51) Majercik, op. sit., pp.99, 193.

(52) Iamblichus, On the Mysteries, III-V, op. sit., pp. 123f.

「形なきものが、形を結ぶ。」（神託断片 M-144）⁽⁵³⁾

これを「神の姿形化」（God-Forming）と呼ぶ。シンプリキウスによれば、浄火界にある神の光が、アether界に結像するのである。物質界から上昇した術者の霊眼には、その像が見える。もちろん、これが神の実像ではない。術者の設定した象徴的姿形が結像しているのである。しかし、その本体が神である以上、いかなる形態を取っても神としての権能を有している。

「この身は、汝の目的に添った自己顕現の幻像に過ぎない。」（神託断片 M-142）⁽⁵⁴⁾

d 魔術武器

テウルゴイの代表的な魔術武器は、イウックス、魔術環（Magic Wheel, στρόφαλος）である。

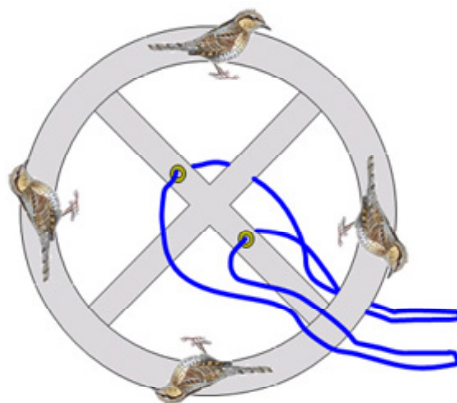
最も古い魔術環には、アリスイの骨（場合によっては生きた鳥そのもの）が結びつけられ、中心部に二つの穴が開き、四つの箭をもつ円盤として作られた。共感魔術のために本物の鳥を用いた呪具は、生臭過ぎるので長く続かなかったと推測される。後世に神殿奉納物として作られたイウックスには、12羽のアリスイ（イウングス）の模型が飾られたものもあった。⁽⁵⁵⁾

しかし、魔術武器としての仕掛けは速やかに洗練されていく。プセロスによれば、エメラルドの台座に埋め込んだ黄金の球体に革ひもをつけ、振り回せるようにしたものだという。その表面には、対応する神名が刻まれていた。

実際にはもっと単純な構造であったと思われる。基本型は円盤の中心に開けた2本の穴に紐を通して、その紐をたぐることにより、円盤を高速で楕円運動させ、うなり叫ぶような音を発する装置である。魔術環とは、右図のように両手で回す一種のうなり木であった。革ひもを握る位置を変えることによって、イウックスの出す音調を変化させることができた。



古代ギリシャでは、紀元前3～4世紀の時代から主として愛の魔術武器としてイウックスとロンボスが使われており、各種の文献でも確認できる。⁽⁵⁶⁾ 最も古いのは、紀元前4世紀のピンダロスの『ピュティア頌歌』において、イアソンがイウックスを使用して魔女メディアに恋の魔術をかけ、祖国へ脱出する手助けをさせたことが語られている。⁽⁵⁷⁾ セオクリトスは、恋の魔術の全文を紹介し、その前半でイウックス、後半でロンボスという単語を使用している。⁽⁵⁸⁾ タヴェンナーはセオクリトスの文脈のなかでは、イウックスとロンボスが同じ魔術環を意味すると指摘した。⁽⁵⁹⁾ しかしながら、イウックスについては具体的な資料が蓄積され実体が把握されているが、ロンボスが何で



(53) Majercik, op. cit., pp.103, 195.

(54) Majercik, op. cit., p.103.

(55) Grace W. Nelson, A Greek Votive Lynx-Wheel in Boston, *American Journal of Archaeology*, Vol. 44, No. 4, Boston: The Archaeological Institute of America, 1944, 443-456.

(56) C. A. Faraone, *Ancient Greek Love Magic*, Harvard: Harvard University Press, 1999, p.8.

(57) Sarah Iles Johnston, The Song of the lynx: Magic and Rhetoric in Pythian 4, *The American Philological Association*, Vol. 125, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1995, pp.177-206.

(58) Theocritus, Idylls 2, *ARCANA MUNDI*, Baltimore: The John Hopkins University Press, 1985, pp.68-71.

(59) Eugene Tavenner, Lynx and Rhombus, *The American Philological Association*, Vol.64, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1933 pp.109-127.

あったかを考察する資料は少ない。⁽⁶⁰⁾

もっと単純な形をしたうなり木は、世界中で魔術用具として利用されている。

魔術武器としてのイウックスは、上記のように単純なものだが、テウルゴイはイウックスに大きな神学的意味を持たせた。テウルギアの力を統括し、プラトンが『ティマイオス』で語った宇宙魂と同一視される女神ヘカテは、黄金の球体とサファイヤなどで飾られた頭飾りを持ち物（アトリビュート）としているが、プセルスはこれをイウックスと呼んだ。⁽⁶¹⁾ 女神ヘカテの宝冠は、浄火界におけるアイデアとしてのイウックスを表象する。

「ヘカテの魔術環の操作。故に、（神託は）儀式のやり方を教え、真に魔術環の運動により、言い表し得ぬ力を発揮する」（神託断片 M-206）⁽⁶²⁾

従って、三種類のイウックスが存在する。

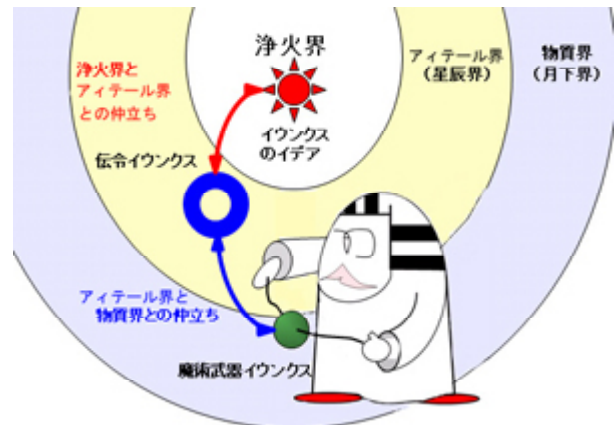
物質界でテウルゴイが操作する魔術武器イウックスは、物質界とアィテール界の仲立ちを行う。アィテール界の伝令イウックスは、アィテール界と浄火界との仲立ちを行う。そして、最終的には浄火界にあるアイデアとしてのイウックスが回転するのである。

「かれらは渡し守なり」（神託断片 M-78）⁽⁶³⁾

プロクロスは「イウングスは「渡し守」と呼ばれる。」と語り、「かれらは物質界から叡智界へとすべてのものを運び、持ち帰る」とも語った。⁽⁶⁴⁾ プラトンがダイモンを神々と人間の仲介者と定義したように、テウルギアにおいてはイウックスの役割は、浄火界から物質界にメッセージを運び、その逆に物質界からのメッセージを運びあげることにある。

この魔術原理について、詳しく述べよう。

魔術武器イウックスを動かすと、その運動は星辰界において対応する運動を共感反応として惹起する。プロクロスは干魘に襲われていたアッティカ地方でイウックスにより雨がもたらされた様子を記述している。イウックスは天候を左右する星々を封縛したのである。従って、魔術武器イウックスの回転は、星辰界のイウックスを自動的に回転させる。⁽⁶⁵⁾



イウックスの形状もさることながら、魔術環の発する音は非常に重要である。イウックスというギリシャ語の単語は、「叫ぶ、絶叫する、雄叫びをあげる」という意味の ἰύξω から来ている。同義語には、「感極まる（歎び、または、苦痛の）叫び」という意味の ἰυγμός と、「歌い手、または、パイプ吹き」という意味の ἰυκτής がある。魔術武器イウックスの出す音は、天球の音楽の音調に協和し、天球に影響を及ぼす。⁽⁶⁶⁾

テウルゴイは、関連する天体の運行をイメージしながらイウックスを振り、天体のイウックス、つまり、伝令イウックスを引き寄せて、術者と神の間を仲介する伝令とした。⁽⁶⁷⁾

伝令イウックスは回転し、アィテール界に音楽を響かせて、浄火界のイウックスのアイデアに共感反応を誘起する。浄火界、つまり、アイデア界のイウックスは、段階を経て上昇してきたテウルゴイの意志を超越する太陽に伝達するのである。

テウルギアの思想と実践は歴史のなかに埋没したが、ルネサンス期にピコ・デ・ミランドライやフィチーノらが「マグスたちのイウックス」として再評価することになる。⁽⁶⁸⁾

(60) Fritz Graf, *Magic in the Ancient World*, Harvard : Harvard University Press, 1997, p.180.

(61) Sarah Iles Johnston, *Hekate Soteira*, pp.90f.

(62) Majercik, op. sit., p.127.

(63) Majercik, op. sit., p.81.

(64) Johnston, *Hekate Soteira*, op. sit., pp.91f.

(65) Hans Lewy, *Chaldean Oracles and Theurgy*, Paris : Etudes Augustiniennes, 1978, pp.250f.

(66) Majercik op. sit., pp.9f.

(67) 堀江聡 前掲書 105-106頁。

(68) 伊藤博明 『神々の再生—ルネサンスの神秘思想』 東京書籍、1996年、227-231頁。

e 象徴と印

テウルギアにおける象徴は、先に述べたように神の顕在化の際に重要になる。一方、印は、『魔術パピルス文書』にもあるように、公式の一部をなすものである。

ここでも、イアンブリコスがテウルギアの特徴を端的に描写している。

すなわち、テウルギアの儀式とは、象徴（シンボラ）と印（シンテマータ）を介して、靈魂の靈質的、情感的、知的同一性を変容させ、その靈魂を造物主（デミウルゴス）に結びつけるものである。⁽⁶⁹⁾

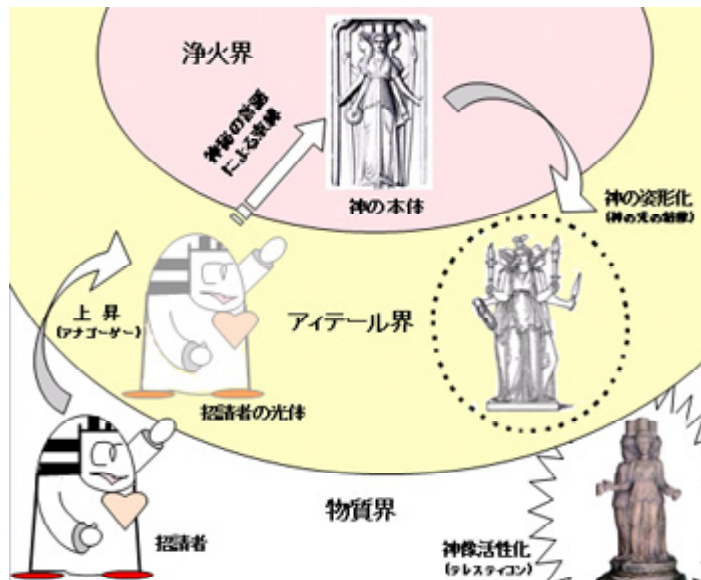
f アナゴーゲー

先に述べたように「上昇」（Anagoge, ἀναγωγή）とは、人間の靈魂が上位世界に引き上げられることである。

元来、『カルデア神託』では人間の靈魂の上位部分と下位部分が記述されていた。

プロクロスは、靈魂を運ぶ容器（オケマータ）として、「肉の容器」、「氣息の容器」及び「宇宙のかつ神聖な容器」の3種類があると語った。⁽⁷⁰⁾

テウルギアの操作により、神秘的な言語で神を束縛し、神の光がテウルゴイの心臓に照射され、物質界からアイテール界にテウルゴイの靈魂をアナゴーゲーするとき、靈魂を運ぶ容器は、非物質の「光体」（Aigoithez soma, ἀνυγοειδεῖς σωμα）である。



神託を得るときなどは、神の光が神の姿形としてアイテール界に結像し、光体のテウルゴイは肉眼の目で見るとくそれを把握し、同時に抜け殻となった肉体の目は、物質界の彫像があたかも生きているかのごとく活性化される様子を知覚の擾乱のなかで認識する。これらの複合的知覚は重なって見えるため、古代の文献を読む半可通の学者は混乱するのである。

しかし、テウルゴイが何らかの魔術行為を神の権能で行うときは、神の光とともに、神の姿形をテウルゴイが纏うことになる。イアンブリコスは、神の外的な姿形を纏うことにより、より精妙な次元の招請が可能になることを言及している。⁽⁷¹⁾ これは現代魔術の召喚作業の手順にも生かされている。この働きも主としてアイテール界で行われる。

そして、テウルゴイがさらに自らの神聖な火花を投射して、淨火界における直知的テウルギアを試みる際には、もはや儀式的所作は必要ない。⁽⁷²⁾

(69) Shaw, op. cit., p.110.

(70) Shaw, op. cit., p.105.

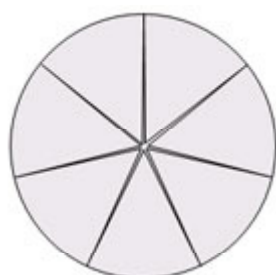
(71) Iamblichus, On the Mysteries, IV—II, op. cit., p. 207.

(72) Shaw, op. cit., p.156.

4 テウルギアの実践

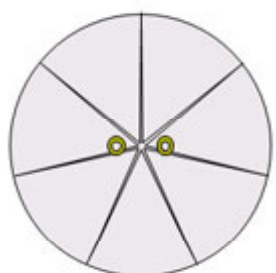
(1) イウックスの作成

ここでは代表的な7母音－7惑星を使用したイウックスを紹介する。
金属加工技術に自信のない者は、市販の柔らかい円盤型の合板を買って彩色するといい。
円盤の大きさは木製の場合は直径12センチ前後が適当と思われる。



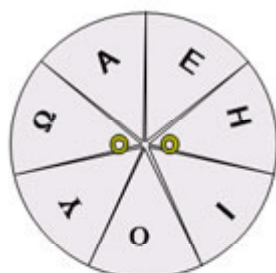
第1ステップ

円盤の裏表に下塗りを行う。色象徴は自分で考えるが、
初心者は、蒼穹を模したペイルブルーで良いだろう。
下塗りが十分に乾いたら中心から7等分する。
下書きの上を彫刻刀で薄く削り、その上に線を引くのも良い。
この線引きはもちろん、裏表とも行う。7の象徴以外にも用途
によっては、獣帯十二宮に分割する、オクターブの八等分などが
考えられるが、汎用性に乏しい。



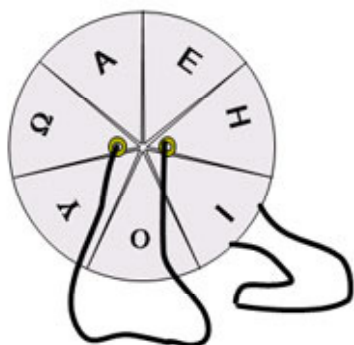
第2ステップ

中心から左右に均等な位置に穴を開ける。
どの位置に開けるかが、鳴り響くイウックスのうなり音を
決定する。大きさ、材質により違うので簡単には言えないが、
木製薄板の場合、直径12センチなら2～3センチが適当で
あろう。あらかじめ、穴を開け、回して確認しても良い。
その場合、第2ステップから第1ステップに進む。



第3ステップ

表にギリシャ語の7母音、それと対応する位置に7惑星の
記号を書き込む。左図では黒色としたが、惑星の対応色でも
良いし、円盤と補色の対応になるように派手な色を使用して
も差し支えない。乾いたあと、ニスなどで、仕上げの防水措
置を施す。上記の場合、ギリシャ語の母音が右廻りに回転す
るとき、惑星は左廻りの回転になることに留意されたい。



第4ステップ

最後に紐を通す。
紐の長さも重要であるが、穴を開ける場合と違い簡
単に調整できるので、長さを変えて最適のバランスを
確認してもらいたい。その際、まず良い音とバランス
で回することを重視する。紐の色に意味はない。

ヴァレンティヌスの弟子マルクスによる7母音解釈
は次のとおりである。⁽⁷³⁾ 詳細な分析は、フラワーズ
博士の研究を参照されたい。⁽⁷⁴⁾

文 字	α	ε	η	ι	ο	υ	ω
天	第1天	第2天	第3天	第4天	第5天	第6天	第7天
惑 星	月	水 星	金 星	太 陽	火 星	木 星	土 星

(73) Shaw, op. cit., pp.185f.

(74) Stephen Edred Flowers, Ph.D., *Hermetic Magic : The Postmodern Magical papyrus of Abaris*, York Beach : Samuel Weiser, 1995, pp.127f.

(2) 七芒星の儀式

神聖な作業を行う前には沐浴をして、衣を替える。伝統的な白の法衣がない場合は、白系統の清潔な服装を用意する。

作業の場所を確保する。テウルギアを行う場は、自由に動ける整頓された空間とする。
最初に行う作業は、七芒星の儀式と呼ばれる。⁽⁷⁵⁾

直立して東に面する。この後の動きはシームレスな一連の動作となる。まず、両手を前にかざし、そのまま左側に掌を向ける。

ギリシャ語の母音 α アルファを詠唱する。

α の発音は英語の father の a と同じである。

「アアアアアアアア」

北に面する。右手のみを拳にして前方に突き出す。

母音 ϵ イプシロンを詠唱する。

ϵ の発音は英語の fret の e と同じである。

「エエエエエエエ」

西に面する。両手を前方に突き出す。

母音 η エータを詠唱する。

η の発音は英語の Mate の a と同じであり、エとイの中間音に聞こえる。

「エイエイエイ」

南に面する。両手を胃袋の上に当てる。

母音 ι イオタを詠唱する。

ι の発音は英語の Feed の ee と同じである。

「イイイイイイイ」

大地に向かい身体を曲げ、手でつま先に触れる。

母音 o オミクロンを詠唱する。

o の発音は英語の Not の o と同じである。

「オオオオオオオ」

空を見上げ、右手を心臓に当てる。

母音 u イプシロンを詠唱する。

u の発音はドイツ語の ü と同じであり、イとウの中間音に聞こえる。

「ウウウウウウ」

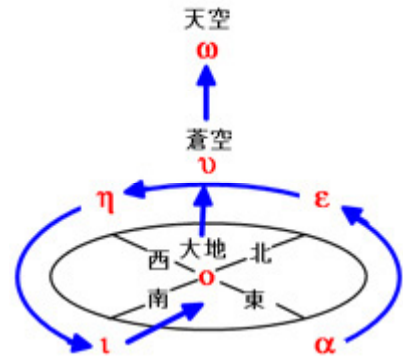
天空を見上げ、頭上に両手をかざす。

母音 ω オメガを詠唱する。

ω の発音は英語の Home の o と同じである。

「オオオオオオオ」

再び、東を向いて立ち動作を終了する。



(75) Flowers, op. cit., pp.155f.

(3) イウックスの回転

イウックスの奏でる音楽は、イウックスの大きさと紐の長さで決定される。従って、特定の惑星に影響を与えるために専用のイウックスが用いられた。しかし、われわれが7母音（7天・7惑星）のイウックスを準備したのは、固有振動による天体との親和性よりも、イウックスがテウルゴイの靈魂に及ぼす効果を重視したためである。⁽⁷⁶⁾

プロクロスが精神集中のためにイウックスを回したように、テウルギアの実践に先立ち、われわれもイウックスを回すこととしよう。

座った姿勢でイウックスを回すと、円盤がふれ回り身体に当たって危険な場合があるので、慣れないうちは、しっかりと両足で立ち、腕を伸ばしてイウックスを操作しよう。

天体に影響を及ぼすときは、その特定の天体を視野に収めながら、その方向に正対してイウックスを回転させる。七大天すべてを扱う魔術操作については、東に面して、7母音の面が右廻りになるように回転させる。その場合、七惑星は北半球の天球が運動するように天の北極（竜座付近）を中心に左廻りに回転する。

こころを無にして、イウックスの回る音に集中しなさい。

イウックスの叫び、うなり音を聞きながら、意識が音に満たされるようになりなさい。

イウックスを回転させる自分と、それを見つめる自分との間に浮遊感を伴うような乖離が生じたら、見つめる自分をイメージのなかで上昇させなさい。そして、あなたの光体の周りに、無数の天体がイウックスの回転に呼応して周回する様子をイメージしてください。

この操作は自分に納得がいくまで、おおむね10分から30分程度行います。

(4) ビジョンの獲得

この儀式は『魔術パピルス文書』（PGM VI. 1-47）から再構成された。⁽⁷⁷⁾

夜明け前に、七芒星の儀式とイウックスの回転を終わらせておく。

夜明けとともに儀式の前半を開始する。

七枚の葉をつけた月桂樹の枝を東に向け突きだし、次を言う。

「月桂樹よ、アポロの前兆の聖樹よ。フォエボスはその身で汝を味わいたり。
枝で組みし月桂冠を頭上に頂き、長い黄金の髪を飾りたり。
アポロは月桂樹を振りかざし、パルナッソス山頂で杖のごとく扱い、谷に向かい高く掲げ、
すべての神々が、死すべき者に答え、死すべき者に予言すべしと求めたり。
悲恋の苦悶のさなかに、ニンフ、畏るべき処女神、天啓の力を与えるはアポロなり。
此方へ迅く来たれ、われは聖なる秤に懇願し、わが手は月桂樹をつかみたり。
われに聖なる回答と予言の兆しを送りたまえ。
直裁に語らば、おお、女祭祠よ、すべてを開示したまえ。
それらがいつ起こり、それらは何故過ぎ去るのか。
予知を与えたまえ、その結果はいずこにかで検証せん。
人類の力を抑制する者よ、来たりて、ペイアンを祝福せよ。
至高なる者、此方へ迅く来たり、われを助けよ。
おお、フォエボスよ、あまたの名前をもつ者よ。
おお、フォエボス・アポロ、レトの息子よ。
遠きより働くもの、此方へ。来たれ此方へ、此方へ来たれ、
預言もて答え、夜のあいだに前兆を示すべし。」

聖なる公式を唱える。

「EH IE IE HI IQ IQ IAQIE IYE IA IAQ HE AEHIOYO

エー イーエ イーエ エイイ イォウ イォウ イーアーオウイーエ

イーウーエ イア イーアーオウ エイエ アーエエイイオーウーオ」

(76) Sarah Iles Johnston, *Hekate Soteira*, pp.101.

(77) Betz, *op. cit.*, pp.110 - 112.

儀式を終了することなく、日没を待つ。
日没までに余裕を見て、再度、七芒星の儀式とイウックスの回転を終わらせておく。
日没を確認し、次の公式を詠唱する。

「わが声を聞け、銀の弓をもつ神よ。
クリュセと聖なるシラの前に立ち守護する者、テネドスの無敵の支配者よ。
黄金の輝きをまとい、嵐の風に乗り、竜を殺す者たる ΜΕΣΕΓΚΡΙΦΙ メセグケリフィよ。
レトの息子 ΣΙΑΩΘ シアォース、ΣΑΒΑΩΘ サバォース、ΜΕΛΙΟΥΧΟΣ メリオォコスよ。
支配者よ、ΠΕΥΧΡΗ Πευコーレ、夜歩く者よ、ΣΕΣΕΓΓΕΝ Σεセグゲン、
ΒΑΡΦΑΡΑΓΓΗΣ Βαρファラグゲス、ΑΡΒΗΘΩ アルベィゾォ、
あまたの姿をもつ神よ、おお、汝、戦車を好む者よ。ΑΡΒΑΘΙΑΩ アルバシアォ、
スミンテウスよ、もし、われが汝が神殿に屋根を張るならば、また、われがよく肥えた
牡牛か山羊の太股を汝が燔祭に捧げるならば、わが祈りを慶賀せよ。」

深夜に月が最も高くなる時間帯に先立ち、再三、七芒星の儀式とイウックスの回転を終わらせる。月の正中（最上昇）時に、次の詠唱を開始する。

「月桂樹よ、アポロの前兆の聖樹よ。おお、処女神よ、月桂樹よ、月桂樹よ、
アポロの女主人よ、ΣΑΒΑΩΘ サバォース、ΙΑΩΑΩΩ イーアーォアーォウオー、
ΙΑΓΧΩΘΠΥΛΑ イーアグコーォシピーラ、
ΜΟΥΣΙΑΡΧΑ ΟΤΟΝΥΤΙΟΝ モーイーシアルウキア・オトニィーボン、
わが道を辿り、疾く来たれ、聖なる先触れを歌いつつ急ぎ来たれ。
清らかな言葉を宣言しつつ、暗夜において真実の言葉を告げよ。
ΡΗΣΑΒΑΑΝ ΑΑΝΑΝΑΑΝΑΝΑ ΑΑΝΑΝΑΑΝΑΝΑΛΛΑΑ ΑΑΑ ΑΑΑ
レサバーン・アーナンアーナーナー・アーナンアーナンアラアーアー・アーア・アーア、
そは汝のため、おお、デリオス、おお、ノミオス、おお、レトとゼウスの子、
この夜、説得力をもつ神託を与えたまえ、夢の神託において真実を語るがごとく。」

女神セレーネとの邂逅ののち、儀式を終了する。

（５）納めの儀式

夜の儀式において、女神の神託が得られた場合は、その後、速やかに実施する。
女神セレーネとの邂逅が夢のなかで行われた場合は、翌朝に実施することとなる（しかし、
無抵抗な夢のなかで女神と会うことはお勧めできない。）。
東に面して立ち、すべての霊的影響力と決別するという意志を固めて宣言する。

「今、ここに出立せよ、世界の主よ、父祖よ、
汝が玉座に戻りたまえ、汝が地下霊廟に戻りたまえ、汝が広間に戻りたまえ、
宇宙の秩序が正されるために。われを危害から遠ざけたまえ。
ヘリオス ヘミン キリエ！」

このあと、静かに儀式の場から出て、儀式の影響を払拭する。

（６）実践上の留意事項

ここでは、基礎的な訓練に関する記述をすべて省略している。少なくとも自分が呼びかける
神々の属性は理解しておいてもらいたい。失敗すればヘカテに喰われるだけである。

VERBORVM PVBLICA

I ∴ O ∴ S ∴

TRACTATVS MAGICVS TERTIVS

TABELLA DEFIXIONIS

IMPRIMI POTEST: I ∴ O ∴ S ∴

NIHIL OBSTAT QUOMINVS IMPRIMATVR

IMPRIMATVR : M.E.S.A. 5=6

MAIVS MCMXCXVIII

封縛のタブレット TM03

Copyrights © All rights reserved I ∴ O ∴ S ∴ 2008

2008年5月28日 I ∴ O ∴ S ∴ 発行

本トラクトは、団員の魔術実践への理解を促進するために作成された。
本トラクトを利用した団員の自由な実践活動を妨げるものではないが、
会員外の使用については、本トラクトの著作権が秋端勉に属することを
配慮されたい。

本文書の内容の一部または全部を、I ∴ O ∴ S ∴ または著作者の文書
による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、
引用、転写することを禁じる。

表紙画：ジョン・W．ウォーターハウス 『魔法円』 1886年